資　料

通学型の通信制高校において生徒の自己開示はどのように実現しているのか

― “教師－生徒”関係に着目して ―

川村博子[1)]・高野美雪[2)]

Performing Individual's Mental Self-Actualization of Students at a Correspondence High School Course

− Focusing on the "teacher-student" relationship −

Hiroko KAWAMURA・Miyuki TAKANO

［要約］通学型の通信制高校が，近年急増している。通信制高校には，様々な課題を抱えた生徒が通学してくる。生徒は，教師を拠り所として学校との関係を維持しており，教師のケア機能能力によって生徒が自己開示を行うと考えられる。

そこで本研究では，教師－生徒間のケア機能要素を含んだ交流に着目し，フィールドワーク及びマイクロ・エスノグラフィーの手法を用いて，教師－生徒間の関わりと生徒の自己開示との関連性について分析した。結果，生徒の自己開示実現は，教師の生徒に対する距離感や，自然な飾らない態度による関係性が影響していることが明らかになった。

キーワード：通学型の通信制高校，“教師－生徒”関係，自己開示，ケアリング

Ⅰ．はじめに

わが国の高等学校教育は，課程別に全日制，定時制，通信制の3種類があるが，通信制高校は，最もマイノリティに位置している。それは生徒数の面だけではなく，通信制高校の歴史が浅いことや，公立より私立が多いこと，転編入生の多さなど，高校としての「異質性」が通信制高校を正統な学校と見なさない要因となっている（尾場，2005）。

通信制高校の教育システムについては，定時制課程・通信制課程高等学校の現状（文部科学省，2013）によると，通信制高校では，教師が対面で指導する授業時間数は，全日制高校のおよそ10分の１であり，学校行事や各種の活動も格段に少ない。

加えて，登校に関しては様々な形態があり，大きく分けて１）集中スクーリング型でふだんは登校を行わない，２）月に２～４日登校を行う，３）週に２～５日登校を行うという３つのタイプがあるが，近年は週に２～５日登校を行う「通学型」の通信制高校が増加している（篠田・菅谷，2011）。

通信制高校において，スクーリングは，単位取得のための重要な要素であるが，通年で実施する方法と年１回５日程度の期間集中して実施する方法がある。後者の「集中スクーリング制」の場合，その期間以外の登校は，ほとんど必要ないわけであるが，「集中スクーリング制」でありながら普段の登校もできる学校も多数存在する。つまり集中スクーリングで年間の登校日数を抑えることができると同時に，希望する生徒は大幅に増やすことも可能なのである。これが「通学型」の通信制高校であり，「通学型の通信制高校」の多くは私立通信制高校である。

1) 九州ルーテル学院大学大学院人文学研究科修了生
2) 九州ルーテル学院大学人文学部心理臨床学科
takano@klc.ac.jp

また，私立通信制高校は，不登校経験を持つ生徒や全日制高校をドロップアウトした生徒の割合が高く，通学に不安を抱えている生徒が多いことが予想される。一方，企業が学生を採用する際に重視する要素の第１位は，８年連続で「コミュニケーション能力」となっている（日本経済団体連合会，2011）。社会的自立を考えると，子どもも保護者も学校生活を通して人間関係を学ぶことを望むことが予想される。つまり，私立通信制高校は，登校不安のある生徒に向けて通学の負担が少ないことを担保しつつ，学校や友人との関わりを求める生徒や保護者に向けて保証を行わなければならないことになる。また，通信制は自学自習が基本であるが，実際には学習することに慣れていない生徒も多いことから，単位取得を確実なものにするためにも登校しての教科指導が必須となってくるのである。このような中で，「通学型」を選択した生徒をスムーズに学校に呼び込むために，私立通信制高校は様々なコースを用意している。各通信制高校のホームページにも見られるように，大学進学，語学，IT 関連コースから美容，スポーツ，芸能に至るまで生徒のニーズに合わせて独自の工夫を凝らしている。その中には，漫画・イラスト，声優，アニメ，ダンス，ゲームなど商業的な色彩の濃いポップカルチャーも含まれており，既存の学校文化に適応できないでいる生徒の興味関心を惹きつけるメッセージとなっている（酒井，2018）。

現代は，若者の興味も細分化しており，強制されることを嫌う「選ぶ」時代と言われる。私立通信制高校は，社会の要請や，若者の志向に合わせて変化を続けていると言えよう。

Ⅱ．問題と目的

近年，高校全体の生徒数が減少するなかで私立通信制高校は依然増加を続けている。学校数においても，平成14年～24年の10年間に80校も増加している（文部科学省，2013）。私立通信制高校増加には，いくつかの要因が考えられるが，その一つに，通信制高校が従来の学年制ではなく単位制を導入したことで全日制を中退する生徒の受け皿となってきたことがある。前籍校で取得した単位が活かせることは，通信制高校への転編入のしやすさにつながっていると考えられる。また，不登校やいじめなどの経験や障害，疾病によって高校入学に不安を抱える生徒にとっては，学校生活の自由度が高く個別の対応がしやすい通信制高校は安心感があるだろう。登校の自由度は，経済的な理由でアルバイト中心の高校生活を送らなければならない生徒にとっても都合の良いシステムと言える。

このように，通信制高校には様々な背景の生徒が在籍しているが，過去のいじめや不登校，家庭内の問題などで精神的に課題を抱えていることも多い（平部ら，2016）。杉田（2009.a）は，通信制高校の生徒は，教師を拠り所として学校との関係性を維持していることを述べている。また，教師に求められる役割の一つとして「カウンセラー的役割」をあげている（杉田，2009.b）。特に近年増加している「通学型」の通信制高校は自分の都合に合わせて登校できるという利点がある反面，決まったクラスがないことが生徒同士の不安定な関係につながりやすいため，生徒はより一層教師を頼りに登校することになる。神崎・サトウ（2015）では，通学型の通信制高校において「学校との関わりをもとめつつも関わり方がわからない」生徒を，職員室を活用して支える仕組みが明らかになっている。つまり，生徒に安心感を与えるためには教師のケア機能をチーム力も活用しながら発揮していく必要がある。

ノディングズ（1997）は，ケアを広く教育にも応用したケアリング理論を展開しているが，それによると，教育は「教える－教えられる」関係ではなく「ケアする－ケアされる」関係のときに成り立つとしている。ケアする人に求められるのは受容，専心没頭，動機の転移（相手の視点から見る），奨励（相手の最良の自己を見いださせる）であり，ケアされる人に求められるのは応答性である。一般的なケア（徳）とは異なり，関係性としてのケアと言える。また，梁（2000）は，教育におけるケアリングについて，ケアされる人（生徒）は，ケアする人（教師）に対して，あるがままの存在を開示する役割を担っているとしている。つまり，両者の間でケアリングが成立する時，生徒は教師に対して自己開示を行うのである。

榎本（1997）によると，自己開示とは個人的な

情報を他者に知らせる行為である。先行研究では，自分自身について他者に語る行為を自己開示と捉えているが，表情・しぐさ・心の構えなど非言語によるものも自己開示に含まれるとされている。自己開示の意義については，次の４つをあげている。１）自分自身をより深く知ることができる，２）胸の中にたまった情動を発散して気持ちがすっきりする，３）親密な人間関係を促進し，そのことがさらに自己開示を促す，４）自己確認の役割となり，それによって不安が低減される。以上の働きによって自己開示する者の精神的健康に良い影響が及ぼされる。

また，開示する自己の領域については，１）精神的自己の知的側面，２）精神的自己の情緒的側面，３）精神的自己の志向的側面，４）身体的自己の外見的側面，５）身体的自己の機能・体質的側面，６）身体的自己の性的側面，７）社会的自己の私的人間関係の側面，８）社会的自己の公的役割関係の側面，９）物質的自己，10）血縁的自己，11）実存的自己に分類される。この他に，「趣味」「意見」「噂話」は自己に直接言及しないが，本人のパーソナリティが窺われるという意味で自己開示の一部と捉えることができる。自己開示の基本的な次元は深さと広がりであり，相手との心理的距離によって，開示のされやすさや開示する側面も変化してくる。一般的に開示されにくい領域は，精神的自己の情緒的側面，身体的自己の外見的側面，身体的自己の性的側面，血縁的自己などである。趣味・意見・噂話は，自己に直接言及しないことから，浅い自己開示と言える。以上のように，自己開示は多くの要素を持つ。

自己を開示することは精神衛生上も重要なことであり，様々な課題を抱えている通信制高校の生徒が少しでも多く自己を開示できる機会を得ることは必要なことと思われる。

通学型の通信制高校において教師と生徒の関わりにおいて，どのようにして自己開示に至るのか，教師－生徒間にケアリングも含めてどのような関わり方が生まれているのかを探ることは，重要な意義があると考えた。

そこで本研究では，教師－生徒間のケア機能要素を含んだ交流に着目し，教師－生徒間の関わりと生徒の自己開示との関連性について分析を実施することを目的とした。

Ⅲ．方法

１．フィールドの概要

本研究のフィールドは，Ｂ県内通信制のＸ高等学校（以下，Ｘ高校）の職員室兼生徒自習室（以下，自習室）であった。Ｘ高校は，多くの高校や大学が集まる文教地区に位置し，JR 駅からも近いためＢ県内各地域から生徒が通学していた。常勤職員４名，非常勤職員２名のほか，専門授業講師５名，生徒は，90名程在籍していた（20XX年１月時点）。全体の約半数の生徒が，年度初めの新入生で，半数は，年度途中の転入生であった。専門授業（高卒資格取得とは関係なし）は，声優・タレント，まんが・イラスト，デッサン，ネイルが行われており，約３割の生徒が受講していた。その他に，レポート対策授業やパソコン検定，サービス接遇検定，色彩検定など検定取得対策の授業が行われていた。登校タイプは，ほぼ毎日通学する生徒から月１回レポート提出時だけ登校する生徒まで様々であった。希望すればいつでも好きな時に登校できるスタイルをとっており，近年増加している「通学型」の通信制高校と言える。生徒は学年で分けられていたが担任制は設けていないため，生徒の状況や要望に応じて全職員で対応していた。

Ｘ高校では，多くの通信制高校と同じように全日制・定時制に比べて校則が緩やかで，衣服や身なりなどの外見面，登校やアルバイトなど行動面においての規則はほとんど存在しなかった。Ｘ高校は集中スクーリング制を採用していたため通常の登校は原則自由であり，学校生活は単位認定に関すること以外は概ね生徒本人の決定に委ねられていた。

２．データ収集手続き

⑴　著者・共著者のフィールドでの立ち位置

著者は，Ｘ高校に校舎設置時から８年間勤務していた。観察時期は，非常勤職員として勤務しており，主に生徒のレポート指導を担当していた。職員・講師の中では最年長であり，教務を担当している多忙な若手職員の後方で支援的役割を担っていた。通常元気の良いタイプの生徒よりおとな

しい生徒と関わることが多く，支援の必要な生徒と過ごす時間も多かった。生徒にとっては「学校で時々会う先生」であり，観察のために生徒の近くにいても違和感のない存在であった。

共著者は，著者のフィールドでのデータ収集手続き，観察，分析方法，倫理的配慮に関する検討を担当した。

⑵　観察概要

20XX 年１月10日から20XX 年５月25日までの約４か月間に，計19時間30分の観察を行いフィールドノーツを作成した。客観的な観察を行うため，観察は，著者の勤務日以外に行った。観察の形態は，その場の状況に応じて参与観察または関与観察とし，なるべく自然な状態を観察できるよう留意した。必要に応じて職員や生徒にインフォーマルなインタビューを実施した。

⑶　X 高校の自習室について

X 高校は２教室で運営されており，A，B 教室からなる集合授業用教室と自習室であった。ほとんどの生徒が集合授業以外，自習室で過ごしていた。登校に関しては授業の有無に関係なく生徒の自由意志によっており，席も固定されていないため生徒は，学年などに関係なく自分の座る席を任意に決めていた。自習室での過ごし方は，教科レポートをする他，周囲の人に迷惑をかけないという条件で生徒の判断に任されていた。そのため生徒は，音楽を聴く，イラストを描く，アニメを観る，ゲームをする，友達としゃべるなど様々な過ごし方をしていた。職員スペースと自習スペースはパーテーションで区切られていたが，音や声は互いに聞こえやすい環境であった。職員スペースは原則，生徒立ち入り禁止であったが状況によっては大目に見られていた。X 高校には単独の職員室はなく，この自習室で教師と生徒が共に過ごしていた。

３．対象と分析方法

対象は，先行研究で得られたデータのうち，本研究の目的に該当する通信制の X 高等学校に在籍する男子生徒１名（当時20歳）及び，職員（F 先生）である。

分析資料として自己開示に至ったケースについて対象生徒と職員の個別エピソード内容を，質的研究法の中で特にフィールドワーク及びマイクロ・エスノグラフィー（箕浦，1999）により検討した。エスノグラフィーにおける観察では，全体の観察から始まって焦点を徐々に絞っていくとされているが，著者はこのフィールドに長年勤務した経験が生かされやすい観察場面条件となっている部分もあると考える。そのような経緯から，本研究の観察の焦点を「教師－生徒間の関わり」と定めて観察を開始した。

分析方法は，X 高校の自習室における教師－生徒間の交流場面から，「教師（または生徒）が生徒（または教師）に働きかけをした時点」から「一連の関わりが終わったと考えられる時点」までを１つの単位として，19のエピソード（19エピソード中，参与12/ 関与７）を抜き出した。なお，カテゴリー名を示す際には，抽象度の高い順に《　》，〈　〉，「　」，『　』を用いた。

４．倫理的配慮

研究開始前に依頼文を配布し，職員・生徒に対して研究趣旨を説明し，参加は任意であること，途中で中止したい場合は，中止ができることを説明した。活動で得られたデータを学術的研究として発表する際，プライバシー保護を徹底することを説明した。校舎責任者（学習拠点の長）及び校長（学校責任者），全職員と，成人である対象在籍生徒からは，全員から研究参加への同意に加え，論文の PDF 公開について同意書を得た。なお，対象者は，アルファベットや数字を用いて表記するとともに，個人情報が特定されないよう観察記録を修正した。

Ⅳ．結果と考察

フィールドノーツから，教師－生徒間の関わりの結果は，15のエピソードであった。そのうち，X 高校における教師－生徒間の関わりは，《会話》《距離感・関係性》《教師のケア》という３つのカテゴリーから構成されていたのは，13のエピソードだった。

《会話》カテゴリーは〈相手と関わる－応答〉〈相手を動かす－応答〉〈話し手の思い〉〈今どきの会

表１．事例のエピソード概要

項　目	エピソード
テーマ	希望進路が決まらない生徒と軽妙の軽妙な会話
生　徒	２年男子Ｄ
教　師	Ｆ先生
エピソード概　要	２年のＤは，少し年長の20歳，経験がある分，言動も落ち着いて感じられる。登校後，しばらくして職員スペースに移動，当然のように空いた職員椅子に座り，携帯をいじってリラックスしている。横でPC仕事をしていたＦ先生が，「来年の４月，どうなっていたい？」と希望進路が決まったかをさりげなく確認する。Ｄは，「決めかねてる」とはぐらかすが，Ｆ先生は，それに応じながら「10年後」に言い方を変える。Ｄは，少し反応するが，なおもＦ先生が畳みかけるように言うと，再びはぐらかしてしまった。あくまでボケるようにつぶやくＤに，Ｆ先生は逐一ツッコミで対応する。

話〉の４つのサブカテゴリーに分類され,《距離感・関係性》カテゴリーは〈物理的距離の近さ〉〈親しい関係〉〈疎い関係〉の３つのサブカテゴリーに分類された。また,《教師のケア》カテゴリーは〈相手を受け入れる〉〈言葉によるケア〉〈別の目で見る〉の３つのサブカテゴリーに分類された。

このうち，観察の焦点を「教師－生徒間の関わり」と定めてさらに検討を進めた結果,「教師－生徒間の関わり」から,《距離感・関係性》で構成され自己開示に至ったことが明らかになった。《距離感・関係性》で構成され，自己開示に至ったケースは，自己開示につながる他の要素として見られた「教師のあっさりとした態度」エピソード（表１）が，ケアリングの要素を含み，最も自己開示につながりやすい状況を生んでいる可能性があった。

今回のエピソードに多く登場したＦ先生は，30代の女性教師である。明るくさっぱりとした性格で，飾らない人柄は表情や口調，服装からも感じられる。特に，元気なタイプの女子生徒のなかにはＦ先生と話すことを登校の楽しみとしている生徒も多い。エピソードの《距離感・関係性》において「あっさりとした」コードが付されたエピソードは全てＦ先生による関わりである。

エピソードの《距離感・関係性》については，X高校の教師はおとなしいタイプの生徒に対しても他の生徒と変わらず「いじる」様子が時折見られる。それに対してある生徒は「先生と生徒という距離が少し縮まった感じがしてうれしい」と語っている（20XX年11月28日）。「いじる」という行為については，昨今の若者のコミュニケーションに多用され,「いじめ」や「からかい」といったネガティブイメージにつながる。しかし，好意や互いが仲良くなりたいという肯定的な特徴（望月ら，2017）もあるといった視点もある。教師による「いじる」という行為には，一方的であったり,生徒の受け止め方や,「いじめ」や「からかい」といった要素は無いか,変遷した経緯はないのか,教師に対する距離感はどうかなど慎重に確認することを十分に行いながら，着目すべき関係性として検討することの重要性も示唆された。

次に，エピソードの《距離感・関係性》において「あっさりとした」コードが付されたエピソードについて検討した（表２）。エピソードに登場する対象者のＤは，他の生徒より少し年長のためか，職員も自分たちに少し近い相手として関わることが多い。それが本人にも伝わっているようで，職員スペースに入ってくる動きもごく自然である。職員用の背もたれのある椅子でリラックスして携帯をいじるＤにＦ先生が，進路の希望が決まったかをさりげなく尋ねると，Ｄは，それをはぐらかすように曖昧に答える。

スピード感があり，リズムに乗って流れていく今どきの軽妙な会話である。ボケとツッコミの役割が決まっていて,その役割は確実に遂行される。同じ言葉の反復によって楽しさが増しリズムも生まれる。隙を見せると畳みかけるように言葉が突っ込まれる。漫才のようにボケ役とツッコミ役を設定した会話は，現代の高校生には馴染みがあり受け入れられやすい。軽妙な会話は，楽しい気

表２．ＤとＦ先生の具体的な会話（一部抜粋）

D	「決めかねてる」
F 先生	「私も決めかねてる。（笑）10年後，どんな仕事してたい？」
D	「10年後？」（ケータイから顔をあげ，少し驚いた表情）
F 先生	「10年後，ニートは嫌やろ？」 （電話が鳴って中断）
F 先生	「D くんの30歳を想像してみよう」
D	「親，死んでるかなー？」（少し上を向いて，ややとぼけるように）
F 先生	「10年後に親死なすなや！あんなにツヤツヤしてるのに…」
D	「オレ，親の歳も知らんし…」（携帯に視線を戻し，つぶやくように）

分を呼び込み，「進路」という気の重い話題も幾分話しやすくなると思われる。これは即興の進路面談だが，いわゆる「進路相談」の場とは全く違った雰囲気の場が形成されている。大﨑・矢島（2013）は，「ツッコミ」技術の教育現場での有用性について述べているが，「ツッコミ」は生徒との「笑いの共犯関係」を結び，コミュニケーションを活性化させるとしている。

『親，死んでるかなー』という言葉が語られる時，D の表情は柔和でにこやかであった。これは進路の話に持ち込みたくないDのボケと解釈される。F 先生も，この言葉に対していつものように丁寧にツッコミを返している。だが，自分の「30歳を想像してみる」場合，通常は仕事や生活などおぼろげでも自身の姿を考えるであろう。そこに唐突に「親」が出てきたということは，D は普段から無意識であっても親の存在をかなり意識していると考えられないだろうか。年長といえども学生しか経験したことのない D にとって「30歳」というのは想像しにくい遠い未来であろう。遠い未来の親は当然それだけ年を取っているのであり，それが『死んでるかなー』という D の不安感とも解釈できる言葉につながっている。D は，高校を複数回転学しており，ようやく卒業まであと一年という所までこぎつけた生徒である。親に迷惑をかけたという思いを人一倍強く持っていたとしても不思議ではない。D は，明るい穏やかな性格で他の生徒との交流も多いが自分のことはそれほど積極的には話さない印象がある。F 先生とのリラックスした会話のなかで思わず自分の本音を少し開示したといえるのではないだろうか。生徒が教師のそばでリラックスする環境で，教師との「近い関係」のなかで「ボケ－ツッコミ」の「リズムがある」会話を繰り返すうち，生徒の本音が少し開示したものと考えられる。「リズムがある」会話はスピーディーな反応が要求されることから直感的に言葉を選んでおり，その分当人の本音が開示される可能性が高いことが予想される。F 先生のあっさりとした態度は，さり気ない会話で生徒の本音が少し開示されることにつながったと考えられる。

X 高校には，過去の経験から他者を受け入れにくくなっている生徒も多いが，教師があまり気を遣わずあっさりと関わることで生徒が安心するような印象を受けることがある。過去に困難を経験した生徒は，周囲に気を遣われやすいことが予想され，そういった配慮にかえって傷つくこともあるのではと考えられる。他の生徒と変わらない態度で自然にあっさりと接することは困難を抱えた生徒に安心感を与えることもあると思われる。生徒に対する教師の自然な飾らない態度そのものが「教師のケア」となり，日々生徒を励ましている可能性がある（表３）。

津守ら（2005）は，教師と生徒のそっけないほど自然な関わりが両者のケアリング関係を基盤として生じることを述べている。ケアリング関係を築くことは，経済性や生産性といった現代で優先されやすいものを超えて，人が人らしく生きることを支え幸福な暮らしと民主的な社会を形成することにつながるとしており，生徒も教師も一人ひとりが主体として自らの意思によって生活と学びを創造することになるとしている。つまり，何事も他から強制されることなく自己決定するのである。X 高校の場合，単位認定に関すること以外全

表３．事例Ｄのエピソードの特徴と自己開示

項　目	エピソード
会　話	問いかけ - 返答，リズム感，ボケ，ツッコミ
距離感・関係性	近い関係，あっさりとした
教師のケア	受容，共感
自己開示	進路が決まらない，親の歳も知らない

て自分で決めなければならない。学校で何を学ぶか，毎日をどう過ごすか，学校に行くか行かないか，学校にどんな服装で行くか，髪形や化粧をどうするか，など全て自ら選択し実行することが求められる。この自己決定に支えられた環境のもとでは，人と人との関係は自ずと飾らない自然なものになる。さらに加えて，教師と生徒が共生する（同じ場所で過ごす）ことによってもありのままの日常が実現し，そこからも両者の自然な関わりが生じると予想される。

また，自然なあっさりとした教師の態度は，威圧感も少なく，現代を生きる生徒からは受け入れられやすい。土井（2009）によると，現代は人間関係が極端にフラット化して上下関係がなくなっており，教師に求められるのは指導ではなく支援であると言う。教師と生徒の自然な関わりと共生する環境は生徒支援にもつながりやすいことが予想され，それは生徒に大きな安心感を与える背景ともなっている。

Ⅴ．結語

本研究は，教師と生徒の関わりが特徴的と思われる例を挙げて，その関わり方や変化を生徒の感情や心理も含めて考察した。結果，自己開示に至った道筋や自己開示を起点とした両者の関わりについて明らかにすることができた（図１）。

自己開示に至った道筋や自己開示を起点とした両者の関わりは，X 高校がゆるやかな自己決定の場であることや教師と生徒が共生する場であることからくる受容的な雰囲気，お互いが自然体であることが大きく関わっているためと考えられる。また，この雰囲気は教師同士の自然な関係を形成しており，それが生徒の心理や行動にも影響を及ぼしている可能性がある。越・西條（2004）も，教師集団の明朗さや連携の雰囲気が教師と生徒のコミュニケーションを成立させ，生徒の学校適応全般に影響を及ぼすことを述べている。

X 高校は学校としては特殊な場であり，「自己決定」と「共生」に特徴づけられ，教師と生徒の「自然体」ということを可能にしている。X 高校の「場の特殊性」は，教師同士の関係にも影響を与え，それが生徒の心理や行動にも影響を及ぼしている可能性もある。神崎・サトウ（2018）は，学校復帰支援として，学内における生徒の多様な「居方」を保障する実践の有効性を示唆した。教師が生徒を大きく受容し，生徒と自然な関わり方をすることは，行為や態度そのものが生徒にとっての重要なケアとなっている。

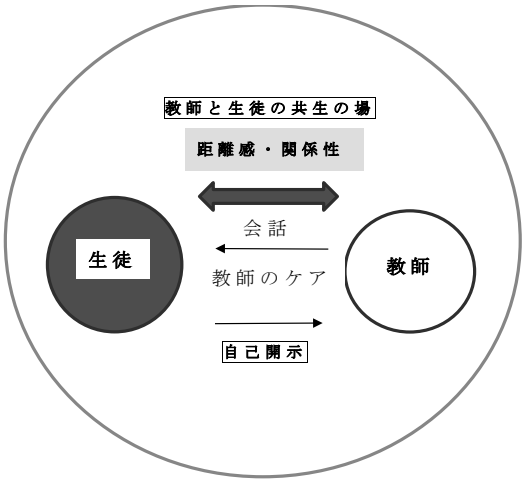

図１．教師ー生徒間の関わりと自己開示に至る構造

本研究では，困難を経験した（経験している）通信制高校生徒が，重要な他者である教師とのどのような関わりを通して自己開示に至るのか，教師－生徒間にケアリングも含めて，どのような関わり方が生まれているのかについて考察してきた。生徒にとって，X 高校は，その後の進路形成

のうえでも重要なポイントとなっており，そこで結ばれる教師との関係が生徒に与える影響は大きい。

近年の多様な教育システムの広がりや社会の急速な変化に伴って，通信制高校を選択する生徒は今後も増加することが予想される。本研究では，X 高校の「場の特殊性」と雰囲気が教師－生徒間の関わりにも少なからず影響していることが明らかになったが，今後は，「場所性」に注目することで両者の関係性や通信制高校の存在意義を考えていきたい。

謝辞

本稿は，2019年度九州ルーテル学院大学大学院人文学研究科学位論文，川村博子（2019）「 通学型の通信制高校における「教師－生徒」関係についての一考察―生徒の自己開示を指標として―」を加筆修正したものです。

本論文の作成にあたり，本研究実施について承諾してくださったX 高校の皆様に，心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

土井隆義（2009）．キャラ化する／される子どもたち―排除型社会における新たな人間像，岩波書店.

榎本博明（1997）．自己開示の心理学的研究，北大路書房.

平部正樹・小林寛子・藤後悦子・藤本昌樹（2016）．通信制高等学校における生徒の精神健康，東京未来大学研究紀要，9，pp.167-178.

神崎真実・サトウタツヤ（2015）．通学型の通信制高校において教員は生徒指導をどのように成り立たせているのか―重要な場としての職員室に着目して，質的心理学研究，14，pp.19-37.

神崎真実・サトウタツヤ（2018）．ボランティアと協働した学級復帰の支援体制づくり―全日制単位制高校におけるフィールドワーク―，教育心理学研究，66，pp.241-258.

越良子・西條正人（2004）．学年教師集団の雰囲気と教師－生徒関係および生徒の学校適応感の関連，上越教育大学研究紀要，24，pp. 61-76.

箕浦康子（編著）（1999）．フィールドワークの技法と実際―マイクロ・エスノグラフィー入門，ミネルヴァ書房.

文部科学省ホームページ，定時制課程・通信制課程高等学校の現状（2013）．https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/__icsFiles/afieldfile/2013/07/12/1336336_2.pdf（2018年12月25日検索）.

望月正哉・澤海崇文・瀧澤純・吉澤英里（2017）．「からかい」や「いじめ」と比較した「いじり」の特徴，対人社会心理学研究，17，pp.7-13.

日本経済団体連合会ホームページ，新卒採用（2011年3月卒業者）に関するアンケート調査結果の概要，https://www.keidanren.or.jp/policy/2011/091.html（2018年12月16日検索）

ネル・ノディングズ，立山善康・林泰成・清水重樹・宮崎宏志・新茂之（訳）（1997）．ケアリング―倫理と道徳の教育―女性の観点から，晃洋書房.

尾場友和（2005）．通信制高校の正統性に関する研究―生徒の学校に対するまなざしの変容を中心として― 関西学院大学，人文論研究，55，pp.279-292.

大﨑素史・矢島伸男（2013）．学校教育における「ツッコミ」の有用性―通信制高校における授業実践を通しての考察，教育学論集，64，pp.53-64.

酒井朗（2018）． 高校中退の減少と拡大する私立通信制高校の役割に関する研究―日本における学校教育の市場化の一断面，上智大学教育学論集，52，pp.79-92.

篠田直子・菅谷正史（2011）．不登校児童を支援する制度・学校，児童心理，65，pp.138-147.

杉田郁代（2009.a）．不登校経験を持つ高校生と教師の関係性の研究Ⅰ―教師と生徒の心理的距離，児童教育研究，18，pp.61-69.

杉田郁代（2009.b）．通信制高校における学校教育相談の研究（1），環太平洋大学研究紀要，2，pp.103-108.

津守眞・岩崎禎子（著者代表）佐藤学（監修）（2005）．学びとケアで育つ―愛育養護学校の子ども・教師・親，小学館.

梁貞模（2000）．ケアリングにおける「教師－生徒」の関係について，関西教育学会紀要，24，pp.56-60.

（受稿：2020年 1 月24日，受理：2021年 3 月31日）

Performing Individual's Mental Self-Actualization of Students at a Correspondence High School Course
− Focusing on the "teacher-student" relationship −

Hiroko KAWAMURA・Miyuki TAKANO

Students attending correspondence course high schools have increased suddenly recent years. Those high schools have many students with various problems. Students rely on teachers to maintain relationships with schools, and teachers are required to have the interaction between teachers and students, including the functional elements of care, that affect the self-disclosure of students.

In this study, we focused on the interaction between teachers and students, including the functional elements of care, that affect the self-disclosure of students, and analyzed them using fieldwork and micro-ethnography techniques through the relationships between teachers and students.

As a result, it became clear that the realization of the students' self-disclosure was influenced by the teacher's sense of distance to the students and their natural attitude.

Key words: A Correspondence High School Course, The "teacher-student" relationship, Individual's Mental Self-Actualization, Care